

ソトボラ新聞

ソトコトによるボランティア支援のための新聞が好評発刊中。

東日本大震災の被災地で獅子奮迅の活躍をするボランティアの情報を、現場から熱くレポートします。

Vol.24 写真・文 NPO みんつな
Vol.25 写真・文 NPO スティープ・ジャービス ソトコト編集部 翻訳 戸叶淳介

写真で子どもものの心ケア

プロの写真家がワークショップ開催

陸前高田



1



2



5



3



4

留学生が大活躍！被災地での二日に密着

復興支援団体NPO「みんつな」のプロジェクトの一環で、写真家の今村拓馬さん、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんらが、被災地の小学校で写真教室を開催した。被災地には今も撤去しきれない瓦礫がうずたかく積まれており、落

ち着いた生活にはまだ遠い。そんな中で様々な感情や思いを溜め込む子どもたちに、写真を通してその胸のうちを表現してほしいとの企画を考えた。

1回目の授業で使いきりカメラを渡されると、子どもたちは一斉に外に飛び出し、青空の下、シャッターを切って走りまわった。2回目の授業では、その写真を使い、それぞれ個性あふれたアルバム作りを行う。見開きの色紙いっぱいになり、自分で選んだ写真を貼りつけ、シールや色鉛筆などで装飾していく。そんな賑やかな授業の中

で、深く心の残る写真があると安田さんは言う。

「ある生徒が綺麗な風景写真を撮ってきました。なぜその景色を選んだのかと聞いてみると、自分たちの町の景色がこんな風に戻ってほしいからという答えが返ってきました」

楽しんでらぶざけたりしながら撮った写真でも、そこには心の奥底にある様々な感情や願いが写る。安田さんはこれまで、フォトジャーナリストとして「伝える写真」というものを重視してきたが、大切な人と過ごした時間や笑顔などといった「残す写真」、そして

自分自身の内面を写す「心を表現するための写真」というものの大切さを改めて考えさせられたという。

今まで各地で写真教室を開催してきた今村さんは、今回は田舎の環境ならではの、素朴で温かい視点の写真が多かったという。写真はツールに過ぎず、カメラという道具を使って日常を再発見してほしい」という今村さんの担当した6年生の作品には、写真の概念に因われない自由な作品が数多く見受けられた。

「子どもには、写真をどう使おうがタブーなんてないということ伝えました。自分で表現したものに間違いはないんです」
西氏はこれを皮切りに、今後も他の小学校などで写真教室を開催していきたいという。

①地中海周辺はおろか世界中どんな都市にでも伝導のテレックスを打つことができるのです①地中海周辺はおろか世界中どんな都市にでも伝導のテレックスを打つことができるのです①地中海周辺はおろか世界中どんな都市にでも伝導のテレックスを打つことができるのです①地中海周辺はおろか世界中どんな都市にでも伝導のテレックスを打つことができるのです①地中海周辺はおろか世界中どんな都市にでも伝導のテレックスを打つことができるのです

ソトボラ

災害ボランティア支援情報サイト

ソトコトでは、東日本大震災で活躍するボランティアを支援するための情報サイトを運営しています！

News

ボランティアの後は身体のケアを忘れずに

ふんばろう東日本支援プロジェクト臨床家サイト

ボランティアの身体ケアのために、全国の臨床家が立ち上がりました。「ふんばろう東日本支援プロジェクト」の後方支援として、ボランティアの方などに、無償で施術をお願いできます。



<http://cureeastjapan.jimdo.com/>

Charity

事業者向けに応援ファンド立ち上がる！

津田鮮魚店ファンド

石巻港から採れた鮮魚を取り扱う『三陸おさかな倶楽部』では、セキュリティ事業者ファンドにて、店舗復興のための投資家を募っています。5月の説明会では100人近くの投資希望者が殺到！



<http://www.musicsecurities.com/communityfund/details.php?st=a&fid=175>

Column

モデルのShogoさんによるボランティアコラム、連載開始

モデル・Shogoのボランティアに行こう！

ファッション誌の第一線で活躍するモデルのShogoさんによる、ボランティア体験コラム「モデル・Shogoのボランティアに行こう！」が、ソトボラにて連載開始。みんなで被災地に行こう！



<http://sotobora.net/column05.html>

<http://sotobora.net/>

食へながらコミュニティ回復 次世代炊き出しは「カフェ風」 石巻

人とふれ合い、
復旧作業の疲れを癒す

3月末に港中学校で開店した「みなと食堂」には、毎日多くの人々が復旧作業の疲れを癒しにやってくる。考案したのは、複数のボランティア団体と連携して復興支援を行う『四万十塾』代表、木村とーるさんだ。広々とした空間でおしゃれな「カフェ風」の炊き出しを行い、食べ終わったらさっさと出て行くのではなく、ゆっくりと語りあい、くつろげる場を提供するのが狙いだった。

「の場」であるところを実感してもらった。来店は誰でも大歓迎で、被災者は無

料、飲食したボランティアは少額の寄付をすることになっている。こうして定期的に人が集まる場があれば、出会いや絆が生まれる。被災者とボランティアの対話や、地元の人同士のコミュニケーションも活発になる。「働く」「食べる」「くつろぐ」という日常的な行為を

共にすることで、コミュニティが形成される。大きな活動も、こうした小さな結びつきから生まれるのだ。「炊き出しカフェ」という新しい復興支援の形を生み出した「みなと食堂」は、被災した他の地域にとっても、コミュニティ回復のモデルとなっている。



①地元の被災者とボランティアが協力して、毎日約200食を用意する。②日替わりのメニューは健康食が中心だ。協力者も常に募集している。③リラックスした雰囲気の中で食事が楽しめる。④疲れた体を癒してくれる「アロママッサージ」も定番のサービスの一つ。⑤地元の看護師たちによる心のケアも、重要なサービスだ。⑥広々とした共有スペースには図書コーナーがあり、DVD映画も一日中上映されている。仲間との談話や新たな出会いの場にもなる。⑦「みなと食堂」では、ほとんどがセルフサービスだ。避難所で暮らす人々や地元の被災者にはすべてが無料で提供される。ここでは、誰もが人々とふれ合い、復旧作業のストレスを忘れることができる。

瓦礫撤去でリハビリに

松村慧「さん」(25)

引きこもりをボランティア活動で克服した



ひと

震災当日、「松ちゃん」こと松村慧「さん」も被災地の様子をテレビで見ている。そして「助けに行きたい」という強い気持ちが、7年間の家の外に出ない「引きこもり」の殻を動かした。よい受け入れ先が見つかり、被災地でのボランティア活動の日々が始まった。知らない土地で苦手を力仕事に明け暮れる毎日、想像を絶する辛さだった。励ましてくれた友人が被災地を去った時は、自分も帰ろうとした。しかし「このままでは自分が変われない

」と直前に思いとどまる。その後、ボランティア仲間や地元の人々に支えられ、成長していった。被災地にきて3ヶ月、今ではボランティア・センター「はまセン」のグループリーダーの一人だ。地元に戻ったら、他の引きこもりの人々や彼らを支援する人々がこの経験をじっくり語るつもりだ。そんな松ちゃんは今現在の心境をこう語る。「人間って面白い。人と会うというのは体験してみないとわからないことです。」